シネ倶楽部

「お前はモロヘイヤ好きで、俺はナダが好き。それだけだ」

相島 葉月
民博 グローバル現象研究部

「ヤギのアリーとイブラヒム」

原題： علي معزة وإبراهيم

2016年／エジプト・フランス・UAE・カタール／アラビア語、手話／98分

監督：シェリーフ・エル＝ベンダーリー

出演：アリー・スブヒー、アフマド・マグディーほか

日本では東京と大阪（本館）で2017年9月に上映

マイクロバスでシナイ半島に向かうシーン

エジプトのエンターテイメント産業

「中東のハリウッド」とよばれる首都カイロの中心街では、ロードショーから単館ものまで数多くの映画が上映されている。映画やテレビ番組などのエンターテイメント産業は、エジプト経済を支える大切な柱のひとつである。映像や音響の技術が高く、サスペンス、ラブコメ、アクションなどコンテンツも豊富なことから、イスラエルを含む中東全域で人気を博している。

一方、欧米や日本の配給会社がエジプト映画を買い付けることは皆無に近い。筆者が知る限り、一九九八年に劇場公開された、エジプト映画界の巨匠ユースフ・シャヒーン監督の「炎のアンダルシア」が最後である。同作品は、カンヌ国際映画祭・第五〇回記念特別賞を受賞したことが、上映の決め手となったのだろう。

子ヤギのナダの活躍でヒッチハイクに成功。左がイブラヒム、右がアリー

中東研究では国際映画祭向けと国内で消費されるエジプト映画のギャップが指摘されてきた。国内市場は映画にエンターテイメント性を求めているのに対し、海外では「社会的に意義のある」作品が高く評価されるのである。例えば、二〇一一年二月にムバーラク大統領を辞職に追い込んだ一月二五日革命を中心とした「アラブの春」を扱った作品は、エジプトでは敬遠されたり、検閲で規制されたりすることが多い一方で、欧米では注目を集める。「ヤギのアリーとイブラヒム」は、エンターテイメント性を追求しつつ、国内外での上映を視野に入れて制作された、新しいタイプの作品である。制作費を海外から獲得し、英語と仏語字幕付きで制作されたものの、二〇一七年三月に一カ月にわたりエジプトで劇場公開された。

若者の国、エジプト

本作品は、白く美しい子ヤギを「婚約者」と称するアリーと、耳鳴りに悩む天才ミュージシャンのイブラヒムを基点に展開するロードムービーである。近所に住んでいながら接点がなかったアリーとイブラヒムは、魔術師が営む治療院で出会う。「三つの小石を三つの水域に投げ込めば呪いが解ける」とするアドバイスに従い、二人は子ヤギのナダを連れて、カイロからアレキサンドリア、シナイ半島へと旅に出る。

エジプトは人口の六〇パーセントが二九歳以下という若者の国である。彼らの悩みは就職と結婚。大学を卒業したものの、親のコネがないため仕事が見つからず、貯金がないため結婚できないといった、負のスパイラルに陥っている男性は多い。住居を用意する義務が新郎にあるため、余剰所得のある家庭では、息子が生まれたときから新居購入の準備を進める。筆者の知人は一六カ月分の給与を使った披露宴をおこなったが、「ジミ婚だね」と親戚に言われたと憤慨していた。

アリーとイブラヒムには、結婚資金を蓄えたり、仕事の世話をしてくれたりするような両親はいない。アリーの母は、子ヤギとの結婚を熱望し、幼馴染が運転するマイクロバス（乗り合いタクシー）の助手をする息子の将来が心配でならない。一方、イブラヒムは鼓膜をつんざく謎の音に悩まされる音楽家の家系に生まれ、自死を選んだ母と鼓膜を破った祖父を前に、自身の運命から逃れる方法を模索する。キャリアも恋人も音の攻撃によって失ったのだ。

ファンタジーと現実のあいだで

本作品は、ショートフィルムで実績を積んだ、シェリーフ・エル＝ベンダーリー監督初の長編作品である。彼は、子ヤギへの愛、黒魔術、耳鳴りなどは、シナリオを展開するために作り上げた「ファンタジー」であると強調する。

フィクショナルな設定から垣間見えるのは、エジプトの若者を取り巻く非常を日常とする生活である。作品中にしばしば登場するマイクロバスは、他に仕事のあてがない若者がつく仕事の代表格である。運転手には薬物常習者が多いという偏見から、アリーが大きなピンクのクマのぬいぐるみをもっていただけで、マイクロバスは検問にひっかかる。乱暴な運転に加え、車体が古いことから、交通事故の発生率も高い。シナイ半島に出かけたアリーとイブラヒムは、マイクロバスでの事故死を子ヤギの機転によって免れる。危険と隣り合わせであることは認識しているものの、庶民には他の交通手段がないのである。

エジプトで貧困を写実的に描写した映画は「悪趣味」とされる。「ヤギのアリーとイブラヒム」にとても幸せな人は登場しない。しかし、不幸や孤独、貧しさを気にかけることなく、穏やかに暮らしている。エル＝ベンダーリーが、エジプトの若者が直面する厳しい現実を、フォークロア的なテイストでふわりと包み込んだことで、ありのままの日常が上質のエンターテイメントに仕上がったのだ。

東京上映会の際にシェリーフ・エル＝ベンダーリー監督と筆者で撮った一枚